

# 伏見城北曲輪

## 伏見桃山城キャッスルランド跡地の調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 2003年1月に閉園した伏見桃山城キャッスルランド跡地が運動公園に整備されるため、事前の試掘調査を実施しました。調査地は伏見城本丸の北曲輪跡で、古図では「大蔵丸」(長束正家郭)、  
「徳善丸」(前田玄以郭)と記された所です。

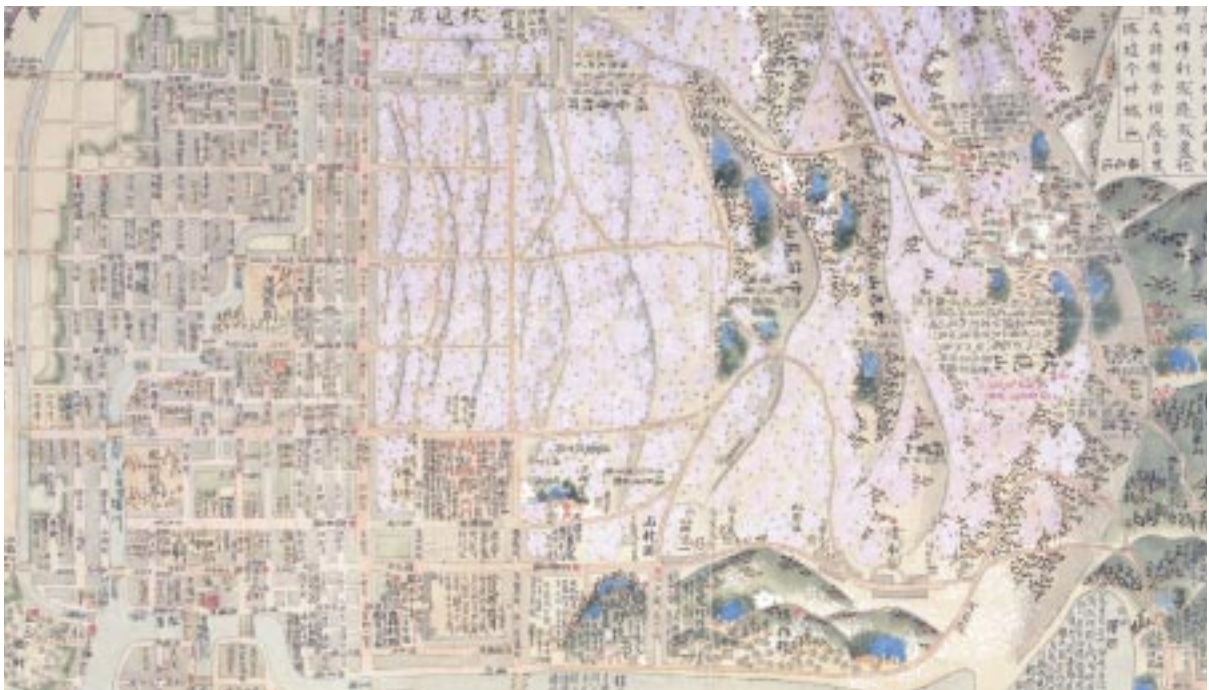
伏見城の歴史 伏見城は豊臣秀吉(1536~98)が文禄元年(1592)に、指月の地(丘陵の南斜面、現在の桃山町泰長老付近)に隠居のための城館を築いたことが始まりです。この時の城を「指月伏見城」と呼びます。ところがこの城は、文禄5年=慶長元年(1596)閏7月13日に畿内を襲った大地震で倒壊してしまいます。明国からの使

者を引見する予定で整備が進められていましたから、秀吉は大急ぎで北東側の木幡山に新たな城を築きます。これが「木幡山伏見城」

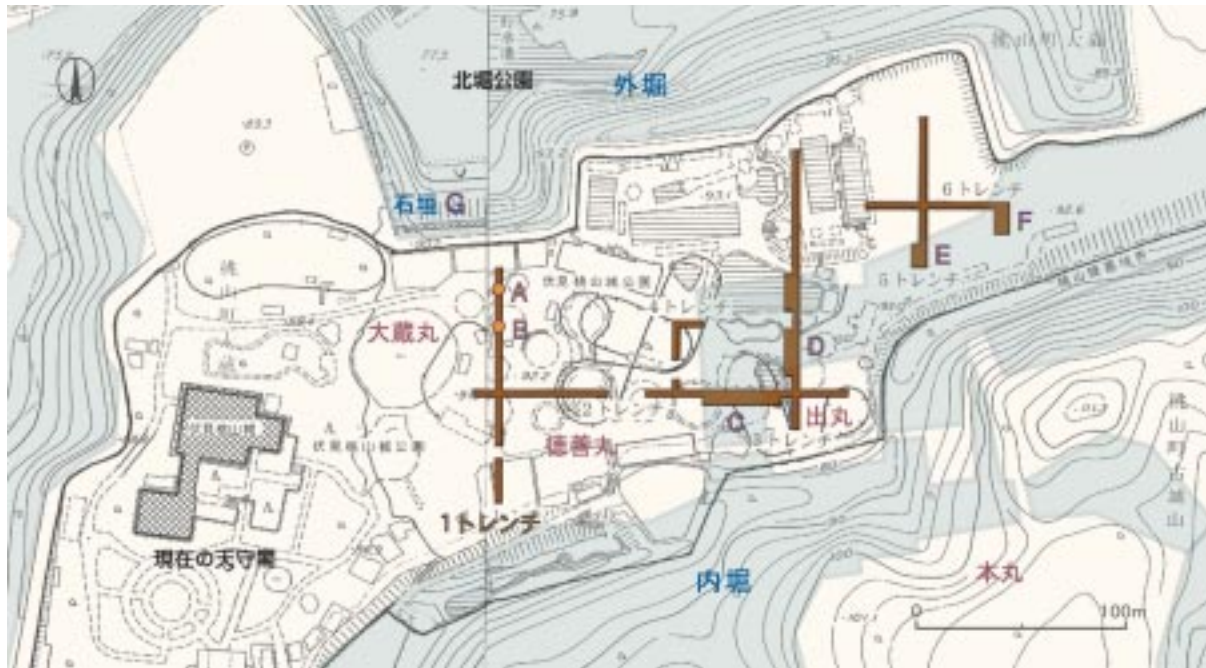
です。この城は、慶長5年(1600)に起こった関ヶ原合戦の前哨戦では、石田三成が率いた西軍に攻められ、焼失しました。合戦後、い



キャッスルランド跡地での調査風景(北東上空から)  
本来の天守閣は左手の山上にあり、現在の模擬天守閣は1964年の建造である。



江戸時代の「桃山」 『城南伏見地図』寛延4年(1751)森幸安  
『森幸安の描いた地図』国際日本文化研究センターより転載 国立公文書館所蔵



伏見桃山城キャッスルランド跡地の調査区および堀の推定位置

ったんは徳川氏の手で再建されますが、元和9年（1623）の徳川家光將軍宣下の儀式を最後に廃城となります。

城の主要な建物は二条城に移され、部材や石垣、庭木に至るまで完全に他所に持ち去られたことが記録にみえます。のちには全山に桃の木が植えられ「桃山」の地名が生まれたことはあまりにも有名です。『城南伏見地図』は江戸時代中期に森幸安によって描かれたもので、桃山と呼ばれた当時の状況が美しく描かれています。

調査の成果 調査地はキャッスルランドが開園される以前に平坦にならされていた。しかし、伏見城当時は南東側に堀と出丸があり、本丸を守る前衛となっていたことが古図からうかがわれます。それでは上の図で説明しましょう。

1トレンチの北端では、北へ落ち込む遺構を検出しました（上図A）。北堀公園の堀は、このAまで堀が及んでいた可能性がありま

す。それを江戸時代に埋めて現在の地形にしたとみられます。

Bでは自然堆積層と盛土の境界が確認できました。これより南は、すべて自然堆積の地層が露出していました。これらは「大阪層群」と呼ばれる数10万年前の海底堆積物の地層で、粘土・泥・砂・礫が交互にみられました。桃山丘陵が隆起した際、ひきずられて地上に現われたものです。大阪層群の堆積する範囲が元の丘陵で、北側は谷になっていたため、造成したもののと思われますが、その先には北堀が南に屈曲する箇所が控えています。谷であったため、屈曲部を設定したと考えられます。

Gの石垣は、北堀公園を造成する際の調査で外堀の南斜面で見つかっています。南斜面にだけ石が積まれたのは後の造成であったためではないでしょうか。

出丸の周囲にも堀が巡らされていましたが、そのうちの西面堀（C）、北面堀（D）を確認し、東

に延びることも確認しました（E・F）。Cでは、堀の幅は34mあり、深さ4.4mまで掘り下げましたが、全く底には達しませんでした。外堀と同規模であったと想定すると、ごく上層部を掘削したものと いえます。調査地の北東部は高く、調査地側は削り込まれて低くなっています。

また、調査地からは瓦類を中心に土師器や国産陶磁器などが出土していますが、その量は非常に少なく、町屋などの生活遺構とは比較になりません。これも城郭遺跡の特徴といえます。

まとめ 桃山丘陵を利用して造成した城郭の地形は、大正から昭和の初めまでは出丸と堀が残っていました。戦後になってキャッスルランドを造成する際、北東側の高まりを削ってその土砂で堀を埋め、全体を平坦にしたものと思われる、昭和30年代まで大まかな地形は残されていたこととなります。

（丸川 義広）